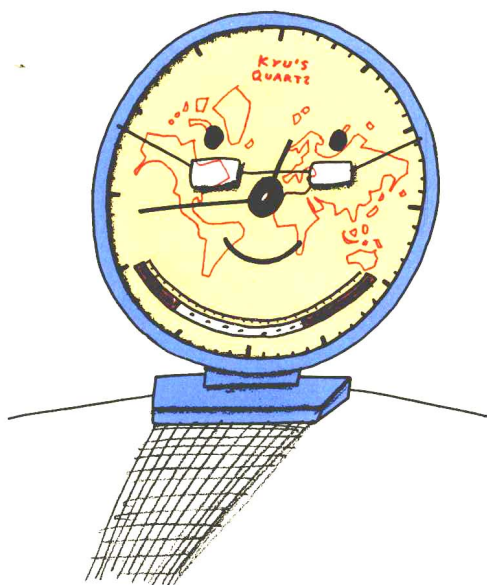


邱  
永漢

# 電卓と 二人連れ

Dentaku to futarizure



新潮社

# 電卓と 二人連れ

邱永漢



新潮社

# 電卓と二人連れ

発行 一九九四年六月二〇日

著者……………邱永漢（きゆうえいかん）

装画・本文挿絵……小島 武

装 幀……………新潮社装幀室

発行者……………佐藤亮一

発行所……………株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 営業部〇三三二六六五一一

編集部〇三三二六六五四一

振替 東京四一八〇八

印刷所……………二光印刷株式会社

製本所……………大口製本印刷株式会社

© Kyū Eikan 1994, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-383703-9 C0095

電卓と二人連れ

◇ 目次

## 電卓と二人連れ

11

まえがき 7

大陸の香港化が怒濤の勢いで進行中 13

香港にマンションを買ったわけ 17

香港の不動産をどう見るか 22

香港の銀行は人に貸さず物に貸す 26

どこの国に行つても他所者が成功する 30

香港の実地検証に華南一帯を歩く 34

福州に佛跳牆を食へに行こう 38

廈門で大陸香港化のキザシを見た 42

見る見るできあがつた香港經濟圏 47

華僑が開放政策を成功に導く 51

香港の生活費は東京の約3分の1 56

宝石を買う時は4分の1から値切れ 60

雲吞麵を食わずに香港を語ることなかれ 64

世界一の中華料理を安く食へる方法 68

灕江下りて得た人生の教訓 72

「三國志」を読んで三峽下りに行こう 76

掛軸を洋額に入れて気分一新 81  
 中国の土産物屋にこんなものがあれば 86  
 円高メリットは海外旅行で 90  
 良品を買いたかつたら原産地に行くな 94  
 気に入った物はその場で買え 99  
 お金を換える時は気をつけよう 103  
 今日私は飛行機に乗っている 107  
 旅の楽しみも、財布の痛みも 111

年をとつても旅行はするのだ 117  
 人生には時々締めくくりの必要が起る 121  
 遠い遠いブエノスアイレスとヨハネスブルグ 125  
 南アの治安の悪さには驚いた 129  
 どんな豪華船も三泊すれば下りたくなる 133  
 旅行のやり方にも選択が必要になる 137  
 ツアーのそのまた安いツアーを利用する 141  
 旅行業者の新商品は日進月歩 145  
 物価の値上がりについて行かなくっちゃ 149

高い物を安く買う努力をしよう 153  
 おしゃれ老人はジーンズにあこがれる 157  
 人品を偽らせるのが上手なおしゃれ 161  
 カジュアル・ウェアでゆとりを持つとう 165  
 私がネクタイ・ヒンをつけないわけ 169  
 年とつて見える人は年をとらない 173  
 ロマン・グレーよ、いつまでも 177  
 仕事を道楽にすればいつも若い 181  
 無名画家のスポンサーになる趣味 185  
 好奇心があれば死ぬまで退屈しない 189  
 いくつになっても「初体験」はある 193  
 食べ放題食べて四半世紀生きのびる 197  
 病氣というスピード・メーターをつけて 201  
 九十九死に一生を得て思い迷う 205  
 幕切れを考えて人生を生きる 209

電卓と二人連れ



## まえがき

東京に住んでも、香港に住んでも、どうせ双方の都市を行ったり来たりしているのだから、考え方はそんなに変わらない筈だと思うかも知れないが、根拠地を東京から香港に移しただけで、ロケーションが違ふせいとか、物を見る角度まで変わってしまう。

一九九二年の一月から、私はアジアをよく見るために、自分の住居を東京から香港に移した。ちょうどその時期に、日本航空の機内誌「アゴラ」に連載を書いてくれないかと依頼を受けた。「アゴラ」はファーストのお客向けの雑誌だから、単なる観光ではなくて、ビジネスにも役立つ内容にしてくれないかという話だったので、折柄、中国ブームに世界の関心が集まっている時期でもあり、投資から買物、飲み食いに至るまで、お金の出し入れとかかわりのある事柄について私の体験談を書くことにした。

いま時、旅行をする人で、電卓を持ち歩かない人は一人もいないだろう。買物の累計をするだけでも電卓は必要だが、外国へ行くと為替レートというのがあるから、日本円に換算しないと、安い高いもわからないし、全部でいくらお金を使ったかもわからない。海外

旅行をするのに、カードを持ち歩く人もあれば、トラベラーズ・チェックやキャッシュを持ち歩く人もある。どちらがトクか、どちらが便利か、は人によって考えが違うし、行く先によっても違いが出てくる。そういった違いが色々あっても、物を買うにあたって電卓のお世話にならない人は先ずいない。だから当今の海外旅行は「電卓と二人連れ」ということになる。

一年間に千二百万人の日本人が海外に渡航するようになったのは、観光客のふえた分もあるが、ビジネスのために海外へ行く人が目立ってふえていることを示すものである。はじめて海外に観光旅行に出かける人のためにはガイド・ブックがいくらでもある。「電卓と二人連れ」ともなると、旅行のベテランとか、ビジネスのために渡航する人、現地に駐在する人向けということになろう。香港に定期的に来る人はもとよりのこと、アジアを股にかけて旅行をする人には、多少なりと参考になるのではないかと自負している。

後半の「新型老人見つけた」はダイエーの社内誌「P・S」誌に平成四年四月号から二年間連載をした。老人問題を扱ったというよりは、年をとったという意識を持たない生き方について自分がふだんから心掛けていることを綴り合わせた。文中、旅行のことがやたらに出てくるのは決して偶然ではない。人生そのものが旅であり、その旅を生き甲斐のあるようにしようとすれば、地球上の旅行がどうしてもスケジュールにのぼってくるからである。元気で且つおしゃれな生き方は何としても旅行の多い人生ではないかと思う。

最後になったが、この本がこうした形で世に出るについては、「アゴラ」の編集長だった神田久孝さん、ダイエー広報部社報課課長・吉岡保久さん、また単行本を引き受けて下さった新潮社出版部副部長・初見國興さんのお世話になった。改めて感謝の意を表したい。

一九九四年五月吉日

邱 永 漢

フランス・ローアンヌのトロアグロにて



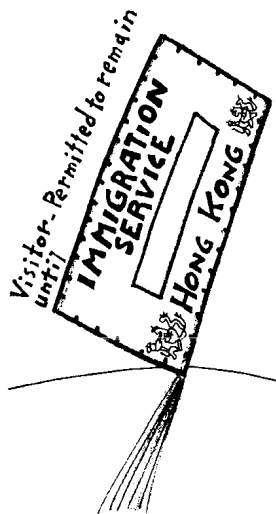
電卓と二人連れ



## 大陸の香港化が 怒濤の勢いで進行中

一九九二年一月一日から私は自分の居を香港に移した。私が小説家を志望して香港から東京に戻ったのが一九五四年、香港亡命中の自分の体験をもとにして書いた「香港」という小説で直木賞をもらったのがその翌年の下半期だから、既に四十年という歳月が経っている。

香港に住んでいた人がまた香港に戻ったのだから、里帰りしたようなものだと思う人がいるかもしれないが、四十年前の香港と現在ではまるで違った環境と言ってよいだろう。私が香港へ亡命したのは台湾で天安門事件のような二・二八事件というのが起こり、私の先輩や友人たちが多く殺されたので、義憤を感じた私が国連に「台湾の将来を決めるための国民投票」を実施するよう、請願書を出し、それが誰の仕業か露見しそうになったから



である。

タッチの差で香港に逃れた私は、生命だけは助かったものの、パスポートもなく、お金もなく、また働き口を見つけることもできず、籠の中の鳥になったまま六年の歳月を香港で過ごした。私自身が亡命者でパスポートをもらえなかったこともあるが、当時の香港は共産党の難を避けるために大陸から避難民が大挙して雪崩<sup>なだ</sup>れ込んだ時期で、ただでさえ狭い香港が、難民で溢れて大混乱を起こしていた。

阿片戦争のあと結ばれた条約では、中国人の出入りを自由に認めるという一条があったが、このまま難民が増えると香港そのものが成り立たなくなるという危機感に見舞われたので、既に入った人たちは別として香港政府は新規の入国を一切認めなくなった。

滑り込みセーフで香港に入ることのできた私はラッキーだったとも言えるが、その代わり狭い島の中に閉じ込められてしまった。香港政府が香港のパスポートを申請できない人のために発行するアフィデビットという旅行証明書を持つて東京へ時々旅行に来たことがあるが、パスポートがないから、日本に住む申請ができない。私もそうだったが、香港の住民たちも大陸との往来はストップされてしまい、ヨーロッパやアメリカには一握りの商人くらいしか出ていかれないから、自由港であるとは言いながら、狭いところで朝から晩までマージャンをやるか、ジョッキークラブに加入して競馬にうつつを抜かすくらいし